

縄文時代におけるヒスイの利用開始から  
大珠盛行期に至る諸問題

小 林 清 隆

## 目 次

|   |                           |     |
|---|---------------------------|-----|
| 1 | はじめに .....                | 157 |
| 2 | これまでのヒスイと大珠研究の歩み概観 .....  | 157 |
| 3 | 初期のヒスイ出土事例 .....          | 159 |
|   | (1) 出土遺跡と遺物 .....         | 159 |
|   | (2) 初期におけるヒスイ利用の特徴 .....  | 164 |
| 4 | 大珠盛行期に至る特徴と問題点 .....      | 170 |
|   | (1) ヒスイ産出地遺跡におけるあり方 ..... | 170 |
|   | (2) 青森県地域におけるあり方 .....    | 171 |
|   | (3) 千葉県におけるあり方 .....      | 172 |
|   | (4) 緒締形大珠のあり方 .....       | 173 |
| 5 | おわりに .....                | 174 |

## 1 はじめに

ヒスイの発色は魅力的である。誰もがそう感じているとは思わないが、私は魅了されている。わけても透明感のある緑色のヒスイは、心地よく視覚を刺激する。そのみか緑色と白色がほどよく混ざったものや、ラベンダーや青色にも目が引きつけられる。今日、宝石の一種に分類されているヒスイを<sup>(注1)</sup>、縄文人はどのような想いを抱いて手に取ったのであろうか。独特の発色や硬さに特別な感情を抱いていたのかもしれない。あるいは今に生きる我々には思いもつかない動機があったのだろうか。残念ながらそれを知るすべはない。ただ、縄文時代に装身具の主要素材の一つになったのは事実である。

これまでの先学による研究の蓄積から、ヒスイの利用は、縄文時代前期にヒスイを産出する地域で開始されたといわれている。以後、主に緑色が入った原石が選択され、それに加工が施され、仕上げられて各地に運ばれていった。特に、中期に至ると富山県氷見市朝日貝塚から発見された長さ約16cmの大型品も生産され<sup>(注2)</sup>、類似の加工品が東日本を中心に各地から発見されるようになる。この中期に発達する大型の装身具は、昭和15年（1940年）に八幡一郎氏によって「大珠」と命名され<sup>(1)</sup>、その後分類案、年代的位置づけ、生産技法、流通、地域性、社会的意義など多方面にわたる研究が進められている。

今回は、ヒスイの利用開始時期から大珠の盛行期に至るまでを検証し、地域的なあり方についても検討を進めたい。

## 2 これまでのヒスイと大珠研究の歩み概観

小論は、ヒスイ利用の黎明期から大珠の盛行期までを主たる対象時期としている。現在ヒスイを対象にした研究は、冒頭で述べたように①分類に関すること、②編年に関すること、③生産に関すること、④流通に関すること、⑤地域性に関すること、⑥縄文社会での意義に関すること、などを追究の目的として進められている。ここでは、主に①・②・⑤に関連する範囲について、主要な研究を振り返っておきたい。

八幡一郎氏は、昭和15年（1940年）に「扁円壜形あるいはやや<sup>ひらた</sup>扁い楕円形をなすもの、またはそれを縦に両分せるがごとき形のもの」で、「おおむね三センチ以上の大形品」を、「硬玉製大珠またはたんに大珠と呼ぶとしよう」と、「大珠」という名称を提唱した<sup>(1)</sup>。また、大珠の特徴として、精巧な穿孔で、片側から貫通され、孔口に摩耗が認められない点などを挙げた。

この論文を発表した当時の八幡氏は、丹念な踏査により、ヒスイの産出地は飛騨地方と姫川溪谷の国内2地点が有力になると予想していた<sup>(2)</sup>。しかし、実際には昭和10年（1935年）に小滝川とその支流の合流点でヒスイが発見されており、昭和14年（1939年）には河野義礼氏が学会誌に発表している<sup>(3)</sup>。なお、ヒスイ産出地発見までの経緯については、安藤文一氏などが詳しく述べており<sup>(4)</sup>、発見前後のいきさつについて、宮島宏氏が詳述されている<sup>(5)</sup>。

樋口清之氏は、昭和15年（1940年）に発表した「垂玉考」において、A型（長楕円形）の垂玉を、第一類と第二類に分類した<sup>(6)</sup>。前者は楕円形または卵形を呈し厚肉重厚で、後者は従来鯉節型と呼ばれていたものと解説している。ただ、両者は区別のない位に類似しているとも述べている。また、管状呈するものをD型第二類として、「側面が中張りになって所謂棗玉紋を呈するもの」を分けている。帰属時期については、A型第一類が中部山間地に出土し、主として中期の遺跡に多く見られると述べた。

江坂輝彌氏は、昭和32年（1957年）に「いわゆる硬玉製大珠について」の論文を著し<sup>(7)</sup>、「鯉節型大珠」

と「緒締型大珠」の分類を提示し、さらに「緒締型大珠」について、白玉を大きくしたようなもの、扁平円盤形のものなどの区分を示唆した。また、「鱧節型大珠」について、「奥羽南半以西、関東、中部に分布し、「中期後半から後期前半にわたって大きな同一文化圏内」にあると主張した。

寺村光晴氏は、昭和40年（1965年）に発表した「硬玉製大珠論」において、形態分類、時期・分布と攻玉技術論を展開し、さらに大珠発生について考察している<sup>(8)</sup>。分類については、鱧節形、緒締形、石斧形、不整形に分け、「縄文中期に突如として出現した」とし、その時期は関東地方の阿玉台、勝坂式土器に伴うと、具体的な土器型式について指摘した。

昭和58年（1983年）に安藤文一氏は、長者ヶ原南地点の調査によっても、ヒスイ大珠生産の開始時期をはっきり限定することはできなかったが、「前期終末～中期初頭にその萌芽のあったことは疑いない事実であろう」と推察した<sup>(9)</sup>。形態については、「鱧節型、緒締型、石斧型、不整形型に分類」されるが、「形態差には地域的な分布の特色などはみられない」との見解を示した。

平成16年（2004年）に創刊された『玉文化』において、鈴木克彦氏は「玉研究の現状と諸問題」を取り上げ、大珠の定義、類型分類などについて見直しを図り、問題点の抽出と様々な提言を行った<sup>(10)</sup>。大珠の定義については、「大きさが5センチ以上で穿孔され有孔である」とし、基本形態として「鱧節形、緒締形、根付形」の3分類、そこからさらに細分されると述べている。また、取り組むべき基礎的な研究課題の一つとして、「類例の集成（地名表、実測図）を通じた実態把握によって系統分類学によるそれらの類型分類を明確にし、土器（型式）との共伴関係による出自や年代的変遷、地域差を考える硬玉自体の編年と型式学的研究」があると研究の方向性を強調した。

令和5年（2023年）には加藤学氏が、ヒスイ利用の変遷を次のようなⅠ期～Ⅳ期に整理した<sup>(11)</sup>。Ⅰ期はヒスイ利用のはじまりで、前期前葉期。Ⅱ期はヒスイ加工のはじまりで、前期後葉～末葉期。Ⅲ期はヒスイの本格的利用への序章で、中期前葉。Ⅳ期はヒスイ利用の本格化で、中期中葉～後期前葉。このような4段階にまとめ、段階ごとの出土例と問題点を挙げた。

ヒスイ研究の進展と歩を合わせ、博物館等におけるヒスイ関連の展示は、最新の地域研究の成果が盛り込まれ大変充実している感がある。ここでは余談になるかもしれないが、参考になった最近開催された展示のいくつかを取り上げておきたい。

令和元年（2019年）に新潟県埋蔵文化財センターが行った『2019年度秋季企画展 海をわたったヒスイ』は、新潟県から出土した初期のヒスイ加工品が展示されたほか、それに後続する各地から出土したヒスイ製玉類が展示された<sup>(12)</sup>。

令和2年（2020年）の茨城県立歴史館の『JOMON Period』では、大珠を複数個出土した遺跡として有名である坪井上遺跡、宮後遺跡や堀米A遺跡の展示を行っている<sup>(13)</sup>。

令和3年（2021年）富山県埋蔵文化財センターは、特別展『珠玉球』を開催し、3つのテーマに沿う展示の中で小竹貝塚のヒスイや境A遺跡などの攻玉資料を紹介した<sup>(14)</sup>。

同年東京江戸東京博物館で開催された特別展『東京に生きた縄文人』では、東京都内で発見された大珠が一同に展示された<sup>(15)</sup>。

小地域になるが、令和4年（2022年）盛岡市遺跡の学び館では、『盛岡の縄文文化』と銘打った企画展中で、盛岡市内の遺跡から出土した塊状耳飾、大珠や垂飾の展示を行い、三角形大珠など形態にみられる地域性を押し出した<sup>(16)</sup>。

令和5年（2023年）に三内丸山遺跡センターで開催された『三内丸山とヒスイ』は、三内丸山遺跡出土ヒスイのほか、青森県内で出土したヒスイを中心に200点が展示された。見応えがあったと共に、地域におけるヒスイのあり方について考えさせられる圧巻の内容であった<sup>(17)</sup>。

令和6年（2024年）福島県立博物館で開催された『縄文DX』では、福島県内の遺跡から出土した主な大珠が展示され<sup>(18)</sup>、公益財団法人千葉県教育振興財団設立50周年記念展示『地中からのメッセージ』では、千葉県内で発掘調査によって出土した大珠を展示した<sup>(19)</sup>。

以上のように、これまでのヒスイ研究の一部を概観したが、ほかにも生産技術、流通、機能などを対象とした重要な論考が数多く発表されている。特に、栗島義明氏の一連の取り組みは、大珠を通じて縄文時代の地域社会構成の一端に迫るとの、自身の課題に向かって研究を推進し、多くの論考を発表している<sup>(注3)</sup>。それについての検討は別の機会を持ちたいと思う。

### 3 初期のヒスイ出土事例

#### (1) 出土遺跡と遺物

鈴木克彦氏が『玉文化創刊号』に掲載した「ヒスイ玉編年表」<sup>(10)</sup>と、『季刊考古学』に掲げた「縄文時代（前期～後期中葉）硬玉編年図」<sup>(20)</sup>は、当時の資料を全国的に集成した注目すべき成果といえる。最近の加藤学氏の利用段階の設定<sup>(11)</sup>も新鮮である。ここでは、鈴木氏の編年図の中期前葉まで、加藤氏のⅠ期～Ⅲ期までのヒスイ利用を対象に、出土例を挙げていく。なお、大珠の分類は、鈴木氏による鰹節形、緒締形、根付形の3形態を基本としたい。また、大きさについては同じく鈴木氏の50mm以上に暫定的にしたがい、それ以下を垂飾と呼ぶこととする。以下では、列島の北から南下しながら見ていく。

#### シラリカ2遺跡<sup>(21)</sup>

北海道二世郡八雲町に所在する。ここから長さ29mmの鰹節形を小さくしたような垂飾の完成品が出土している。中央部からやや上に最大幅を持ち、上端部と下端部が尖り気味になる。左右側面は平坦で、最大幅付近に穿孔が行われている。研磨によって全体に形状が整えられた垂飾である。帰属時期について、「風倒木の影響を受けた層から出土しているが、周辺の遺物の出土状況から縄文時代前期後半であることはほぼ確実である」としている。また、石材の産地分析が実施され、糸魚川・青海産と同定されている。小型な垂飾ではあるものの全体が調整されて、形状と発色からは優美さが醸し出されている。

#### フゴッペ貝塚<sup>(22)</sup>

北海道余市郡余市町に所在する。貝塚を伴う集落が検出されており、墓と考えられた土坑の底面から垂飾が1点出土している。素材は良質なヒスイで、全体に丁寧に整形されている。長さ24mm、幅19mmと小ぶりで、形状は隅丸の三角形状である。産地分析で糸魚川産と推定されている。垂飾自体は底面付近からの出土であるが、土器は前期・中期・後期と時間幅が長くなっている。集落の主体となる時期が前期末～中期初頭であることから、この時期の可能性が高いと推測される。しかし、中期・後期の土器の存在を考えると、明確な時期決定は難しいともいえる。

#### 宮田館遺跡<sup>(23)</sup>

青森県青森市に所在する。竪穴住居の床面から垂飾未成品が出土している。この未成品は長さ39mm、幅32mmの楕円形で、漂石を素材にそのまま使用しているともみられる。孔は表側から1か所穿孔が行われ、さらに裏側の3か所に穿孔を行おうとした痕跡が存在する。いずれも穿孔を開始して未完通のままで終わ

っている。両側とも穿孔に用いた工具の特定は難しいが、棒状錐であった可能性が高い。なお、石材について産地分析が実施されており、糸魚川・青海産のヒスイという判定が示されている。竪穴住居は前期末に位置づけられており、床面出土から出土している状況からこの時期の垂飾と考えられる。

#### 熊ヶ平遺跡<sup>(24)</sup>

青森県下北郡川内町（現むつ市）に所在する遺跡である。1点ヒスイ製垂飾が出土している。直径17mmの不整円形を呈し、穿孔は中央部をわずかにずれて、両側から行われている。包含層から出土しているため、はっきりとした時期は示されないが、前期末葉から中期初頭に考えられている。

#### 笹ノ沢（3）遺跡<sup>(25)</sup>

青森県八戸市に所在する遺跡である。平面形状円形で断面形状がバケツ形になる土坑の底面付近から垂飾が1点出土している。形状は隅丸方形と円形の間で、直径22mm、厚さ9mmである。材質は透過性が高い良質なヒスイで、全体に研磨が施され、孔は中心からわずかにずれた位置に片側から穿たれている。開口部に紐ずれは認められないが、孔壁はツルツルな状態で線条痕は観察できない。自然科学分析が行われており、糸魚川産であると判定されている。確実に遺構に伴う土器がないため、明確な時期は明らかにできていないが、遺跡の主体的な時期である中期初頭に帰属する可能性が高いと推測されている。

#### 明戸遺跡<sup>(26)</sup>

青森県十和田市に所在する遺跡である。第4号住居跡凹地捨て場から、大珠の破片が出土している。全体に褐色を帯びていて、被熱の結果と観察されている。遺存部は丁寧に研磨されて光沢を持ち、大珠の一部になると推定される。遺存部の長さが42.5mmあるので、かなり大きな大珠であったと推測される。穿孔痕跡は観察されていないので、残存部から推測すると根付形大珠を分割し、その一部分との見方ができる。出土土器から前期末葉に比定されている。

#### 餅ノ沢遺跡<sup>(27)</sup>

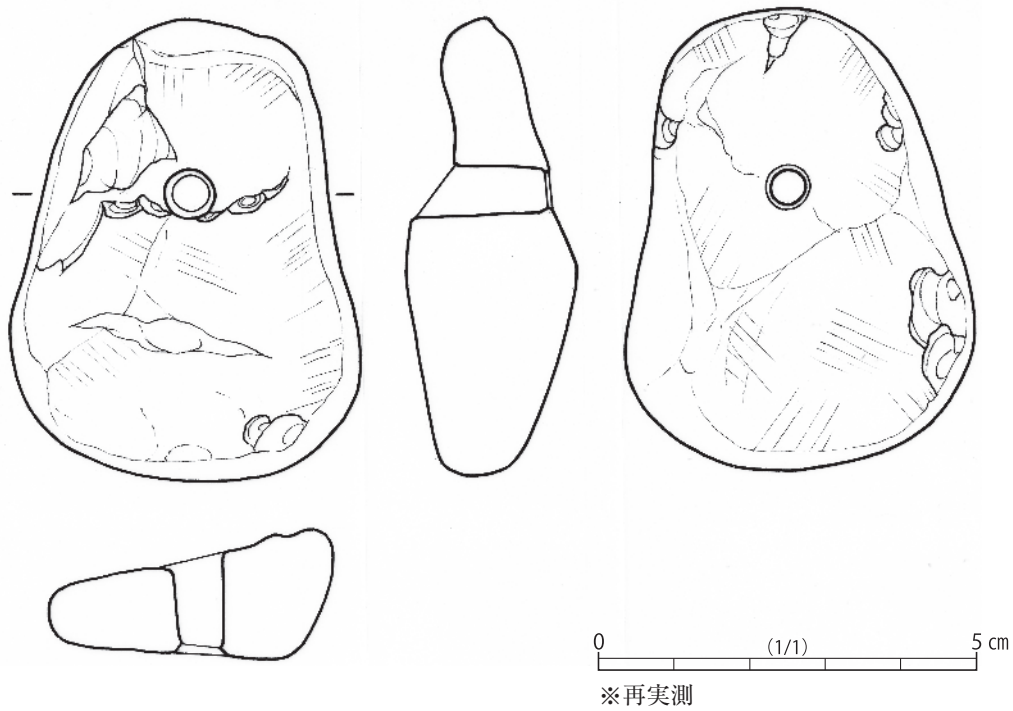
青森県西津軽郡鱒ヶ沢町に所在する遺跡である。第2号捨て場と付けられた遺構から垂飾未成品が出土している。素材は透過性に優れた良質なヒスイである。長さ約33mm、幅24mmの大きさと形状は隅丸長方形である。穿孔は、中心からやや上部に寄った位置に開始され、途中で終わっていて未貫通である。穿孔部の断面形状は半円状で、その孔壁は光沢を放つほどにツルツルな状態になっている。穿孔工具として棒状錐が推定されているが、研磨剤はその使用の有無も含め不明である。裏面は曲面を成し、両側面は平滑である。上端部と下端部には、敲打が加えられたような小さな泡状の痕跡が認められる。出土している土器から、「時期的に中期初頭の位置づけが可能であり、県内から出土したヒスイ製品としては最古段階に属する」とみられている。

#### 大松遺跡<sup>(28)</sup>

千葉県柏市小青田に所在する遺跡である。報告書が刊行されてからしばらく経過していながら、研究者による検討の機会を失っている、ともいえる大珠が出土している<sup>(注4)</sup>。遺跡は前期後半と中期後半に集落が営まれ、中期後半に形成された環状集落の北側に、黒浜式期から～諸磯式期の集落が展開する。大珠は前期に比定された竪穴住居の覆土から出土している。ここから出土している遺物は、黒浜式～諸磯式・浮島式の土器と、磨製石斧や石皿の石器類である。大珠の大きさは長さ61mm、幅48.5mm、厚さ22mmになり、重さは86gである。今回改めて実見し、再実測と写真撮影を行い第1図に掲載した。平面形状は不整形で、強いて例えれば括れの弱い洋梨形を呈している。表裏面は凹凸が認められ、中央部が厚く、上部が薄くな

っていく。周縁部は角張っている状態が残され、研磨の状態は顕著ではない。割れた漂石を素材にした可能性が高い。孔は中央部からやや上部に寄った位置に開けられている。片側からの穿孔である。

この大珠の時代的な位置づけについて、かつて筆者は報告書で示されていた、前期の帰属とすることには迷いがあった<sup>(29)</sup>。しかし、今回の機会を好機と捉え、観察と土器などの出土状況を検討し直した。その結果、中期の土器が見当たらない状況と、定型的な鯉節形に調整されていないことなどから、報告書で示された所見は適切な判断とするに至った。したがって、成品としては最古段階の大珠ということになる。



第1図 柏市大松遺跡出土大珠

### 天神遺跡<sup>(30)</sup>

山梨県北巨摩郡大泉村（現北杜市）に所在する遺跡である。長さ55mmになる大珠が土坑底面からやや浮いた位置から出土している。土坑からは諸磯c式土器が倒立して検出されており、この時期の埋葬にかかわるものとの推測が示されている。幅は30mm、厚さが22mmである。素材は、角張った漂石の特徴を残している緑色の良質なヒスイである。孔は素材のやや細まっていく上部で、中軸線からやや右側に寄った位置に片側からの穿孔で開いている。孔の周辺は光の透過が良好である。貫通側は曲面を呈し、最大厚の位置からやや薄くなる位置に当たる。穿孔工具は管錐と考えられる。土坑の底面付近から出土した諸磯c式土器から前期後葉に比定され、以来最古段階の大珠として人口に膾炙することになる。

### 東部八幡原遺跡<sup>(31)</sup>

長野県の北部に位置する東筑摩郡生坂村に所在する。竪穴住居の覆土下層から、「透光性に富み、緑色の深みのある色彩が漂う良質の逸品であることを窺わせる」垂飾の成品が出土している。大きさは長さ41.3mm、厚さ11.4mm、重さ22.3gである。素材に明瞭な調整を加えることなく、孔は平坦な面からの片側穿孔である。検出した遺構は、調査区の関係から部分的な調査にとどまるが、黒浜式土器が出土しており、この時期の垂飾と考えられる。ただ、遺跡では中期の遺構も検出されており、前述した柏市大松遺跡と検出状況が似ているので、実物の観察が必要と思量した。そこで生坂村に伺ったが、土器や玦状耳飾などは実見し得たものの、ヒスイ製垂飾の実物調査は諸般の事情から叶わなかった。

### 南赤坂遺跡<sup>(32)</sup>

新潟県西蒲原郡巻町（現新潟市）に所在する。農地造成に伴い緩斜面の調査が行われた。この調査では、包含層から「の」字状石製品2点、玦状耳飾2点、滑石製円形垂飾（形態は根付形）1点、有孔石斧2点などと共にヒスイ4点が出土している。その中の1点は角柱状を呈し、柏崎市大宮遺跡で出土したヒスイ加工品に形状が近似する。長さは51mmで研磨は施されていない。また、角礫状の原石1点、剥離が認められるもの2点が出土し、その中の1点に被熱が観察されている。竪穴住居は検出されていないが、前期終末から中期初頭の土器が主体となるので、確定的ではないが、ヒスイもこの時期に伴うと推測されている。

### 西谷遺跡<sup>(33)</sup>

新潟県刈羽郡刈羽村に所在する。遺構から1点、包含層から11点の計12点のヒスイが出土している。遺構は土坑で、そこから出土したものは、原石の所々にわずかに剥離を施しており、荒割段階と考えられている。長さ56.3mmで、何らかの形状を作出することを目的に作業を開始したと推測される。大きさから推測すれば、大珠を目的としていたとみても否定はできないだろう。ほかに包含層から出土した4点の図が掲載されている。いずれも角礫状の素材に剥離や研磨が認められる。包含層から出土した土器は、刈羽式が主体で、諸磯式、蜆ヶ森式などがあることから、ヒスイも主体となる土器群と同時期と考えられる。

### 大宮遺跡<sup>(34)</sup>

新潟県柏崎市に所在する。ここから研磨が施された角柱状のヒスイ加工品が出土している。自然面はみられず、剥離面と研磨面が確認されている。研磨は大変丁寧と観察されているが、目的とした形状は明らかにならない。共伴する土器から諸磯a式～諸磯b式期と考えられている。紹介されて以来、最古段階のヒスイ加工品として有名になっている。

### 和泉A遺跡<sup>(35)</sup>

新潟県上越市に所在し、妙高山の北東側で標高350m前後に立地する。土器や石器の廃棄ブロックから

大珠1点と石核1点が出土している。大珠は長さ68mm、幅48mmの楕円形で、側縁が直線的に整えられている。孔は中央からわずかに上に開けられている。穿孔は両側からで、厚さの中間で貫通する。さらに原石1点が出土している。この原石は良質で全面に剥離が観察される。さらに広範囲に煤が付着していることから、加熱の可能性が指摘されている。産地分析が行われており、糸魚川産と同定されている。

#### 大角地遺跡<sup>(36)</sup>

新潟県糸魚川市に所在する。遺物は敲石として使用されたとみられている原石で、表面は全体的に黄白色に変色している。ただ、材質自体は透過性の良い極めて良質なヒスイで、キラキラした結晶が全体に観察できる。土坑の最下層から出土しており、帰属時期は相伴土器に基づき前期前葉に位置づけられている。加工痕は認められず、ほかの石材を使用した敲石と、使用部位が同位置であることから敲石との判断が下されている。使用部位は稜を成す角張った位置である。遺跡はヒスイが漂着する現海岸から500mほど内陸に立地し、磨製石斧の素材となる蛇紋岩や、工具となる石材を採集に向かうには好立地である。同じ土坑から、ほかに剥片2点が出土している。その1点は被熱が観察され、古墳時代の遺物が混入する層と接する範囲から出土し、もう1点は後世の遺物が混在しない層から出土している。発見後やや時間を経ているが、現時点でこの敲石を遡るヒスイの利用は確認されていない<sup>(5・12)</sup>。

大角地遺跡は、滑石を用いた攻玉遺跡として知られており、出土している垂飾未成品にも注意しておく必要があるだろう。例えば、長さ26mm前後の小さな未成品は、平面形は中膨らみの隅丸長方形で、中央から上に両側からの穿孔が行われ、中央部で貫通している。厚さ8mmと扁平であるが、平面形は鱈節形大珠のそれに近似している。このような垂飾が前期前葉から存在し、球状耳飾などと共に装身具の一翼を担っていたことに留意しておきたい。

#### 馬場山遺跡群<sup>(37)</sup>

富山県越中宮崎の海岸に隣接する下新川郡朝日町に所在する。遺跡群はD・G・H遺跡と地点が分かれ、現海岸から500m内陸に入った丘陵上に展開する。D遺跡からはヒスイ原石16点出土しており、そのうち2点には剥離が加えられて加工を開始した痕跡が認められ、「玉類未成品とするべきかもしれない」と考えられている。

G遺跡からは、蛇紋岩、滑石、ヒスイを石材とする未成品13点が出土している。ヒスイ製の未成品は1点で、剥離により形状を整形し、一部に研磨が確認でき、穿孔を行った形跡が残されている。穿孔は、孔底にへソ状の凸部が認められないので、棒状錐によって開始されたと推定される。また、蛇紋岩製の大型未成品や垂飾未成品が出土している。これらヒスイ製や蛇紋岩製の未成品の存在から、それらを素材にした攻玉遺跡である可能性が指摘されている。さらにH遺跡からは、滑石製の穿孔段階まで進捗した未成品が出土している。

以上のような出土品と中期前葉に位置づけられる遺構の時期から、この時期にヒスイ産出地周辺で大珠生産が開始されていたと推測されている。

#### 柳田遺跡<sup>(38)</sup>

富山県下新川郡朝日町に所在する。黒部川に関わる扇状地帯に立地する。道路改良工事に先行して調査が行われ、竪穴住居や土坑が検出された。周辺からは球状耳飾欠損品や筋砥石が出土しており、攻玉関係の遺跡と推定されている。ヒスイは竪穴住居から剥片1点、土坑から角礫3点などが検出されている。加工品の出土はみられない。遺構の保存状態は不良で、縄文土器は前期末葉が主体になっている。調査区の

保存状態自体が不良なため、出土土器とヒスイの関係は不明瞭である。土器の中心時期から推定すれば、ヒスイの帰属時期は前期末葉になろうか。

#### 小竹貝塚<sup>(39)</sup>

富山市に所在する。ヒスイが漂着する海岸である越中宮崎海岸、市振海岸からは西へ約43kmの地点に立地する。ここからは垂飾未成品が出土している。ヒスイはさわやかな新緑に光が射したかのような、透明感があるいわゆる琅玕質で、その表面に研磨を施している。全体に細長く、中央部がやや膨らんで片端部に向かってすばまっていく。穿孔の痕跡は認められず、これ自体で完成品である可能性もある。しかし、紐ずれなどは観察されていないので、使用時の状態を想定することは困難である。単独で検出されており、ほかに未成品などは検出されていない。縄文土器は、福浦下層式～蜷ヶ森Ⅰ式、北白川下層Ⅱb式～北白川Ⅱc式、諸磯a式～諸磯b式、刈羽式の影響を受けたものなど搬入土器が多いとされる。

#### 上久津呂中屋遺跡<sup>(40)</sup>

富山県氷見市に所在し、氷見丘陵の裾部に立地する。1号谷と命名された谷状部から大珠の未成品1点が出土している。長さ60mm、幅50mm、厚さ20mmで平面形状は略楕円形である。白地に鮮やかな緑が入った標石をそのまま素材にして、一部に剥離を加えているようにみえる。また、研磨も一部に施しているが周縁部には手を加えていないようだ。孔は中心部からわずかにずれた位置に、下方から右斜め上方へ角度をつけて開始している。そしてその初期段階で終わっており未貫通である。穿孔工具は棒状錐と推測される。1号谷からは土器をはじめ土製品や石器などが出土し、その時期も早期後半から後期前葉にわたっている。時期の決定は難しいが、素材の加工の程度や、玦状耳飾、滑石製垂飾などの存在を考え合わせると、前期の遺物になる可能性が高いと考えられる。

## (2) 初期におけるヒスイ利用の特徴

管見によれば、前期～中期初頭の帰属が考えられるヒスイは、20遺跡から出土した60点になった。その出土遺跡分布を第2図に示し、個々の遺跡の遺物については第1表に提示した。また、第3図・第4図に前期から中期前葉と考えられる主なヒスイ資料を掲載した。これらから初期ヒスイの特徴についてまとめてみたい。

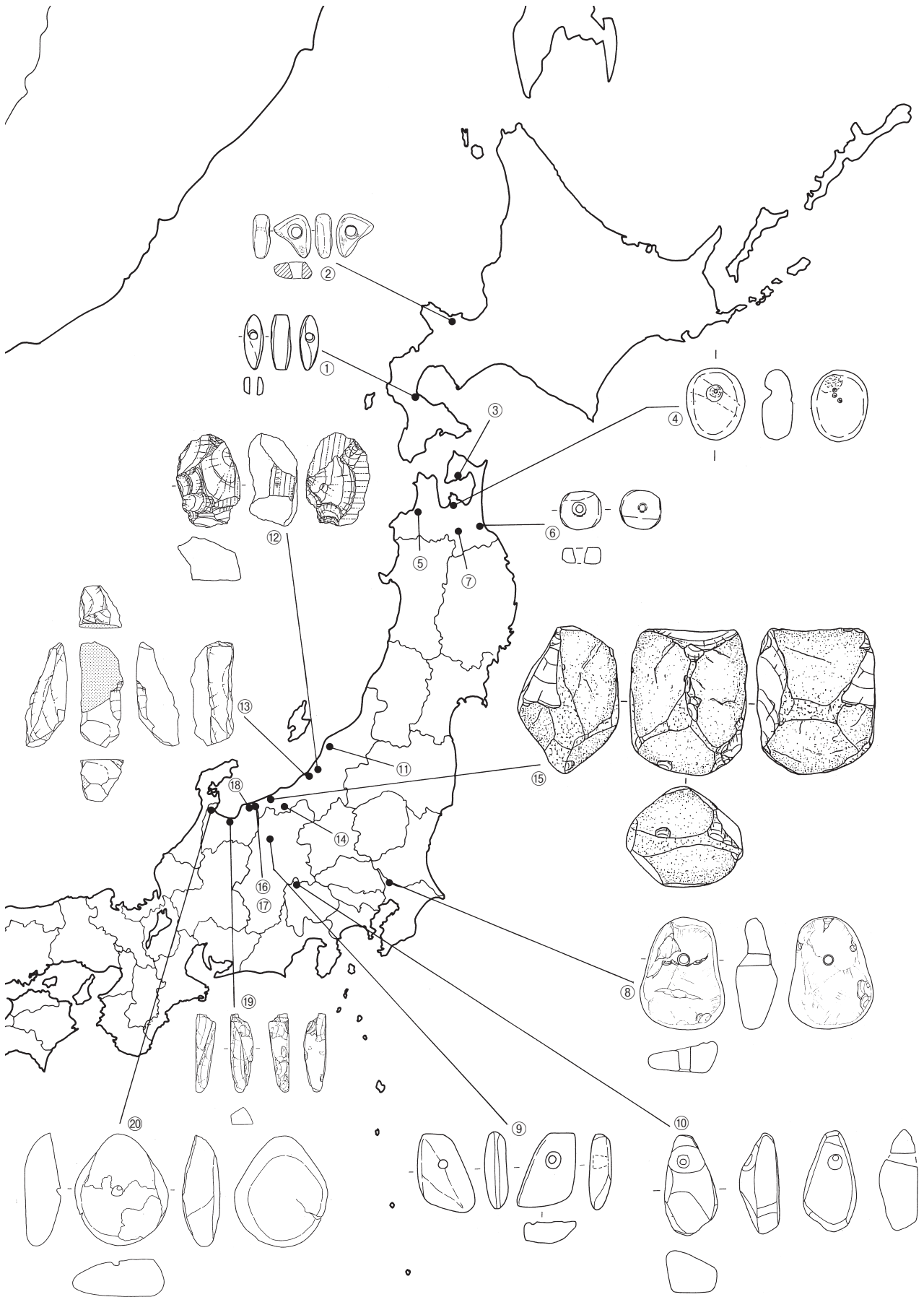
なお、第2図中のNo.は、第1表の○で囲んだ遺跡No.であり、第3図・第4図のNo.も第1表のNo.にそれぞれ対応している。また、⑧-8の大松遺跡から出土した大珠は筆者が再実測した図を掲載し、⑨-9の東部八幡原遺跡については、報告書の図を一部改変して再トレースしている。その他の図については、報告書掲載の図を転載している。

まず、現時点で最も古段階に位置づけられるヒスイは、大角地遺跡の前期前葉の土坑から出土した敲石として使用された原石である。当初は道具としての利用であり、加工の対象ではなく、加工するために用いた工具の石材であったようだ。硬さが優先されたのであろうが、当然発色や光の透過性について気がついてははずである。敲石が出土した同じ土坑から剥片2点が出土しており、その1点には被熱が認められている。それは加工を行ったとも推測される痕跡であるが、未成品や成品は出土していない。そして大角地遺跡例以後に道具の石材として定着するかというと、そのような状況は認められない。1遺跡のみでの発見は、偶々感を持たざるを得ない。ただ、石斧生産の活発化に伴い、この時期に糸魚川近辺の海岸で、漂石としてのヒスイの存在に目が向く契機があったと考えられる。木島勉氏がヒスイの産出地を、産地A

第 1 表 前期～中期前葉のヒスイ一覧

| 所在地    | No. | 遺跡名  | 出土状況   | 時期            | 種類・状態   |       | 文献         |     |    |
|--------|-----|--|--|---------------|---------|-------|------------|-----|----|
| 北海道    | ①   | 1 シラリカ2遺跡  |  | 前期後半          | 垂飾      | 成品    | 立田ほか 2000  |     |    |
|        | ②   | 2 フゴッペ貝塚   | 土坑(墓?)   | 前期末～中期中頭      | 垂飾      | 成品    | 熊谷ほか 1990  |     |    |
| 青森県    | ③   | 3 熊ヶ平遺跡  | 包含層  | 中期中頭          | 垂飾      | 成品    | 下山ほか 1995  |     |    |
|        | ④   | 4 宮田館遺跡  | 竪穴住居   | 前期末葉          | 垂飾      | 穿孔途中  | 小笠原ほか 2007 |     |    |
|        | ⑤   | 5 餅ノ沢遺跡  | 捨て場  | 中期中頭          | 垂飾      | 穿孔途中  | 太田原ほか 2000 |     |    |
|        | ⑥   | 6 笹ノ原(3)遺跡                                       | 土坑   | 前期末～中期中頭      | 垂飾      | 成品    | 平山ほか 2004  |     |    |
|        | ⑦   | 7 明戸遺跡   | 竪穴住居 SiO4窪地  | 前期末～中期中頭      | 大珠?     | 破片    | 成田ほか 2010  |     |    |
|        | ⑧   | 8 大松遺跡   | 竪穴住居   | 黒浜式～諸磯 a 式    | 大珠      | 成品    | 西川ほか 2011  |     |    |
| 千葉県    | ⑨   | 9 東部八幡原遺跡  | 竪穴住居   | 黒浜式併行         | 垂飾      | 成品    | 西沢ほか 1999  |     |    |
| 山梨県    | ⑩   | 10 天神遺跡  | 土坑(墓)  | 諸磯 c 式        | 大珠      | 成品    | 新津ほか 1994  |     |    |
| 新潟県    | ⑪   | 11<br>12<br>13<br>14 南赤坂遺跡                       | 包含層  | 前期終末～中期中頭     | 柱状加工品   | 研磨    | 前山ほか 2002  |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      | 角礫状   |            |     |    |
|        |     |  |  |               |         | 剥離あり  |            |     |    |
|        |     |  |  |               |         | 剥離・被熱 |            |     |    |
|        | ⑫   | 15<br>16<br>17<br>18<br>19<br>20<br>26 西谷遺跡      | 土坑   | 前期末葉          | 未成品(原石) | 研磨・剥離 | 田中ほか 2017  |     |    |
|        |     |  |  |               | 包含層     | 前期末葉  |            | 未成品 | 研磨 |
|        |     |  |  |               |         |       |            | 未成品 | 研磨 |
|        |     |  |  |               |         |       |            | 未成品 | 研磨 |
|        |     |  |  |               |         |       |            | 未成品 | 研磨 |
|        |     |  |  |               |         |       |            | 破片  |    |
|        |     |  |  |               |         |       |            |     |    |
|        | ⑬   | 27 大宮遺跡  | 廃棄場  | 諸磯 a 式～諸磯 b 式 | 加工品     | 研磨途中  | 平吹 2004    |     |    |
|        | ⑭   | 28<br>29 和泉 A 遺跡                                 |  | 中期中頭          | 大珠      | 成品    | 加藤ほか 1999  |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      |       |            |     |    |
|        | ⑮   | 30<br>31<br>32 糸魚川市 大角地遺跡                        | 土坑(SK62)   | 前期前葉          | 敲石      |       | 加藤ほか 2006  |     |    |
| 剥片     |     |  |  |               |         |       |            |     |    |
| 剥片(被熱) |     |  |  |               |         |       |            |     |    |
| 富山県    | ⑯   | 33<br>34<br>35<br>36<br>37<br>38<br>49 馬場山遺跡群D遺跡 | 竪穴住居(第1号)<br>竪穴住居(第2号)<br>竪穴住居(第3号)<br>竪穴住居(第3号)<br>土坑(75号)<br>包含層<br>◇<br>包含層 | 中期前葉          | 原石      |       | 山本ほか 1987  |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      | 分割    |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      |       |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      |       |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      | 表面風化  |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      |       |            |     |    |
|        |     |  |  |               | ◇       |       |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      |       |            |     |    |
|        | ⑰   | 50<br>51<br>52<br>53<br>54 朝日町 馬場山遺跡群G遺跡         | 竪穴住居(第5号)<br>竪穴住居(第3号)<br>(包含層)<br>◇<br>◇                                      | 中期前葉          | 未成品     | 穿孔途中  |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      | 表面風化  |            |     |    |
|        |     |  |  |               | ◇       |       |            |     |    |
|        |     |  |  |               | ◇       |       |            |     |    |
|        |     |  |  |               | ◇       |       |            |     |    |
|        |     |  |  |               | ◇       |       |            |     |    |
|        | ⑱   | 55<br>56<br>57<br>58 柳田遺跡                        | 竪穴住居(AI-II ①)<br>土坑(SK01)<br>土坑(SK28)<br>包含層                                   | 前期末葉          | 剥片      |       | 島 2005     |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      | 角礫    |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      | 角礫    |            |     |    |
|        |     |  |  |               | 原石      |       |            |     |    |
| 富山市    | ⑲   | 59 小竹貝塚  | 包含層  | 前期末葉          | 未成品     | 研磨    | 町田ほか 2014  |     |    |
| 氷見市    | ⑳   | 60 上久津呂中屋遺跡                                      | 1号谷  | 前期末葉          | 大珠未成品   | 穿孔初期  | 朝田ほか 2013  |     |    |

網掛け 前期の可能性が高い



第2図 前期～中期前葉のヒスイ出土遺跡分布

(原産地、姫川・青海川流域の上流部)、産地B(転石のある姫川・青海川中・下流域)、産地C(標石のある河口から海岸)に分け、産地Cは糸魚川市大和川海岸から富山県朝日町宮崎海岸までの約30kmとしている<sup>(41)</sup>。便宜的に産地A・B・Cをまとめてヒスイ産出地として捉えるならば、大角地遺跡は産出地の中核に立地しているといえる。

次に注目したいのは、前期後半～末葉に考えられているヒスイである。前期前葉からはかなりの時間が経っており、その間の事情はよくわかっていない。にわかには成品もしくは未成品が出土してくる時期である。それらを列挙すると、北海道シラリカ2遺跡、青森県宮田館遺跡、千葉県大松遺跡、長野県東部八幡原遺跡、山梨県天神遺跡、新潟県西谷遺跡・大宮遺跡、富山県柳田遺跡・小竹貝塚・上久津呂中屋遺跡の出土品を挙げることができる。その中でも大珠と呼べる成品2点が、ヒスイ産出地からみたら遠隔の地から出土している。1点はすでに広く知られている天神遺跡の諸磯c式土器を伴う土坑から出土した1点で、もう1点は、大松遺跡から出土した諸磯a式期の竪穴住居から出土したものである。後者の時期比定は、前期とするには疑問があるという声も承知の上で、再度の検討を経て決定に至った。この2点は漂石に磨きを施し、穿孔している共通点があり、素材となった漂石の原形が残されている。さらに明確な時期は未確定であるが、上久津呂中屋遺跡から出土した大珠未成品も、素材である漂石の形状がそのままに近い状態で穿孔が開始されている。

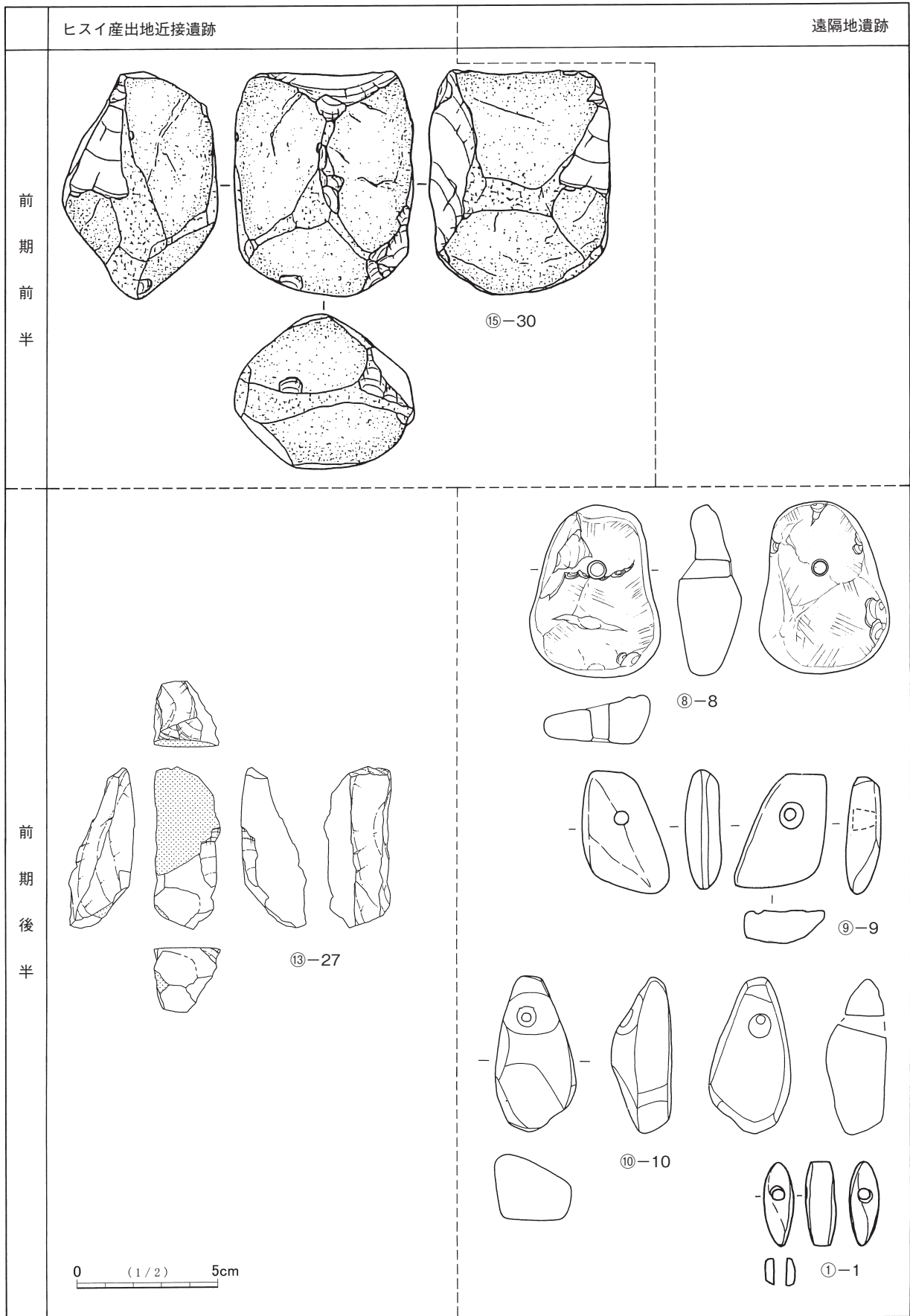
垂飾の成品や未成品としては、シラリカ2遺跡と東部八幡原遺跡から成品が出土しており、宮田館遺跡には穿孔初期段階の未成品が存在する。シラリカ2遺跡の垂飾は、全体に研磨による整形が行われ、この時期では例のない優美な対称形を作出している。東部八幡原遺跡の垂飾は、漂石にわずかに加工を施して穿孔したと考えられ、大松遺跡や天神遺跡の大珠と通じるところがある。

ほかに西谷遺跡、大宮遺跡、柳田遺跡、小竹貝塚からは磨きを認める未成品や原石・剥片が出土している。しかし、磨きが一部分にすぎず、穿孔の痕跡が認められないため、どのような形状を目的にしていたか不明である。

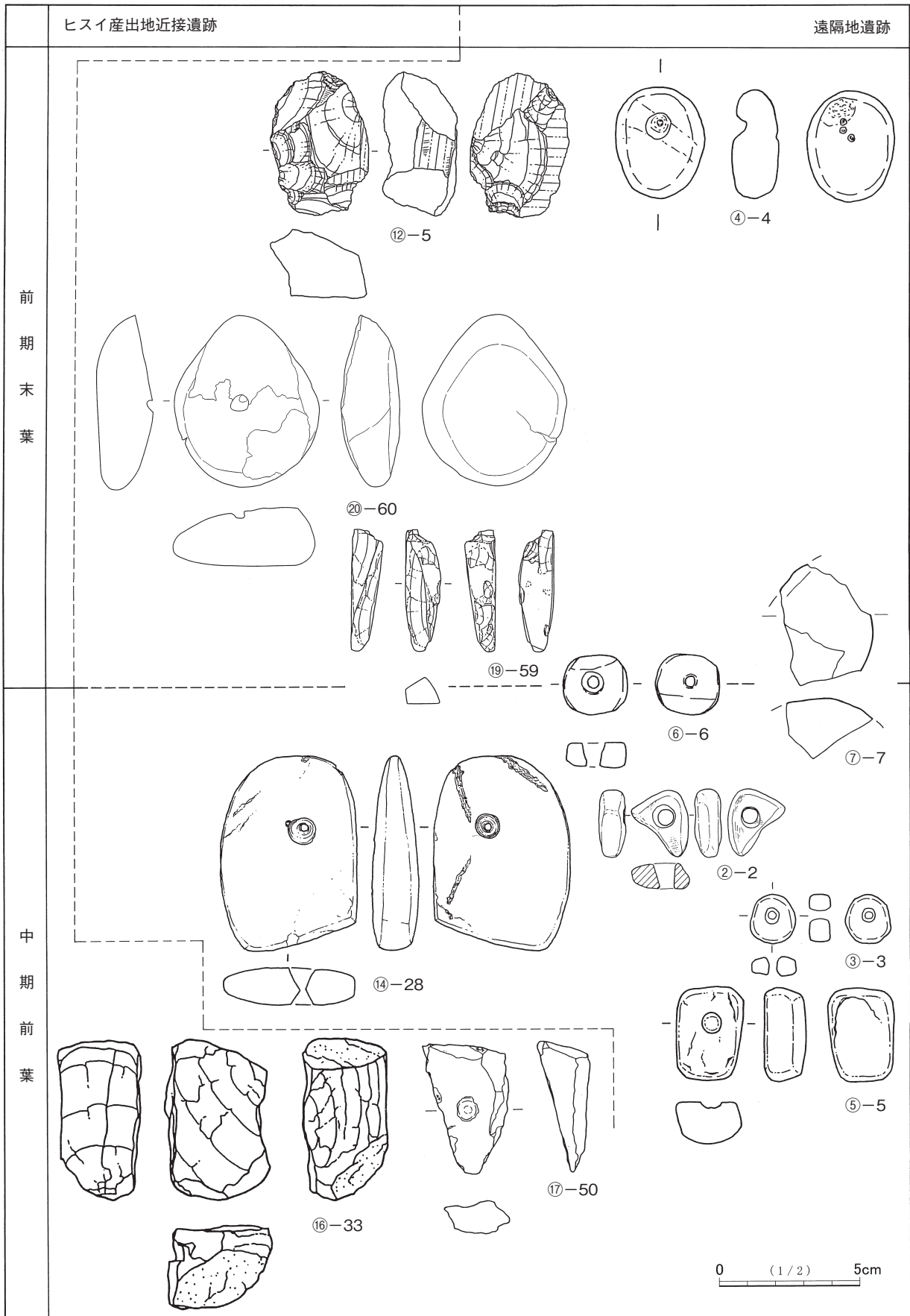
この時期に、ヒスイ産出地に大珠や垂飾の生産を行っていた遺跡は発見されていない。ましてや千葉県や山梨県で、原石が持ち込まれ大珠が生産されていた可能性はゼロである。産出地で漂石を採取し、分割や剥離を行い、磨きを施すなどの加工が行われていたことから推測すれば、一部に対して穿孔を行ったことも考えられる。しかし、成品となったヒスイが遠隔地から散発的に出土している状況について、明快な説明がつかない現状がある。

前期末～中期前葉と考えられるヒスイが出土しているのは、フゴッペ貝塚、熊ヶ平遺跡、餅ノ沢遺跡、笹ノ原(3)遺跡、明戸遺跡、南赤坂遺跡、和泉A遺跡、馬場山遺跡群D・G遺跡の9遺跡になる。大珠に比定されるのは和泉A遺跡の1点で、明戸遺跡から破片が1点出土している。垂飾はフゴッペ貝塚、熊ヶ平遺跡、笹ノ原(3)遺跡から成品が出土し、餅ノ沢遺跡、馬場山遺跡群G遺跡から未成品が出土している。

まず出土遺跡の分布状況で注目されるのは、ヒスイ産出地および近傍に所在する遺跡が4遺跡、青森県も4か所の遺跡で出土していたという点である。産出地周辺での出土点数が多くなる傾向が看取され、ヒスイ製の玉生産が開始されていた可能性を示す一方で、遠隔地にもヒスイが運ばれていった時期である。明戸遺跡の例は産出地から離れており、前期の2例と状況の変化は感じられないものの、和泉A遺跡は比較的産出地からの距離は近い位置である。後者の穿孔は両側から行われ、宮田館遺跡から出土した垂飾と



第3図 前期～中期前葉の主なヒスイ集成 (1)



第4図 前期～中期前葉の主なヒスイ集成 (2)

共通する。餅ノ沢遺跡の未成品は敲打痕が認められ、加藤学氏や長谷川大旗氏は多面体敲石の転用の可能性を指摘している<sup>(11・42)</sup>。その可能性を全く否定はできないが、長さ32mmであることから、敲石としては小型すぎるようにも思われる。また、穿孔は遺跡内で行ったとの推定もできるが、仮に素材が多面体敲石であっても、その状態で搬入されたか、分割した状態で搬入されたか、その判別は難しい。穿孔工具は棒状錐とみられ、馬場山遺跡G遺跡の未成品との類似も興味深い。しかし、ヒスイの採取から成品に至るまでを一貫して行っていた、いわゆる攻玉遺跡の存在は確認できない。特徴に幾つかの共通点が認められるものが、各地から出土しているといえるにとどまる。

以上のような状況から、前期～中期前葉のヒスイについて下記のようにまとめられる。

- ヒスイの利用は、前期前半にヒスイ産出地に所在する遺跡で敲石に利用し、道具として始まる。
- 大珠は、前期後半に出現し、産出地から遠隔の地から散発的に出土する。
- 大珠は、素材の形状を部分的にとどめている。
- 垂飾は、大珠と同時期に、産出地から遠隔の地から散発的に出土する。
- 前期末葉～中期前葉に、産出地周辺でのヒスイ出土数が増える。
- 前期末葉～中期前葉に、青森県からの出土数が目立つ。
- 生産遺跡は、発見されていない。

#### 4 大珠盛行期に至る特徴と問題点

##### (1) ヒスイ産出地遺跡におけるあり方

ヒスイは、前期末葉～中期前葉にかけて、玉の素材として次第に存在感を持ったと考えられる。しかし、右肩上がりの本格的生産に移行していった訳ではないようだ。それは中期前葉の乏しい出土数が如実に示すところである。小論でいう本格的な生産とは、糸魚川市長ヶ原遺跡の資料に基づき復元された攻玉、すなわち原石の採取から整形・研磨・穿孔・仕上げの工程<sup>(8)</sup>が、繰り返されて生産が行われていたことをいう。関雅之氏が述べるように、「現在の段階では糸魚川地区で、縄文中期初頭～前葉の大珠または大珠製作遺跡は確認されていない」状況が続いている<sup>(43)</sup>。生産遺跡といえるのは、長者ヶ原遺跡<sup>(44)</sup>、寺地遺跡<sup>(45)</sup>である<sup>(注5)</sup>。

小池悠介氏によれば、長者ヶ原遺跡のヒスイ生産は、中期中葉から後葉にかけて盛行期となり、鯉節形、不定形、玉斧形の製作が確認されているという。また、寺地遺跡の第1号住居址からは土器や石器とヒスイ原石、剥片、未成品が出土し、土器から中期中葉に位置づけられている<sup>(46)</sup>。その時期にヒスイ産出地に立地するいくつかの遺跡で、大珠の生産が活発化し、仕上げまで進んだ成品が各地に搬出されたと推測される。ヒスイの攻玉工房といわれる寺地遺跡第1号住居址からはヒスイ原石などの総数は多いが、完成したヒスイ製大珠は出土していない。また、長者ヶ原遺跡では、鯉節形大珠の完成品が遺構に伴わない状況で出土している。このように攻玉遺跡に残る成品はわずかにすぎないのが実情である。このあり方を表層的にみれば、硬玉遺跡において生産された鯉節形大珠の成品の大部分が、中期中葉から後葉にかけて、東日本を主体に各地に搬出されていったと考えられる。

長田友也氏によって示された、新潟県を中心とした中期における大珠の分布からは、鯉節形大珠が主体になる傾向が明瞭に捉えられる<sup>(47)</sup>。さらに長田氏は「硬玉製大珠のより詳細な盛行期は、中期後葉・大木8b式以降と考えられ、馬高式土器の盛行期以降に硬玉製大珠の本格的な盛行期が到来する」との見解

を述べている。このような傾向から、小池氏が長者ヶ原遺跡で確認したように、ヒスイ産出地における生産の盛行期が、中期中葉から後葉になるというのは妥当な見解である。

## (2) 青森県地域におけるあり方

ヒスイ産出地から遠方の地域では、何か変化が生じたのであろうか。まず、前期～中期初頭の出土地で突出していた北東北地域、青森県における状況を確認したい。第一の注目遺跡として、圧倒的な存在感を持つ遺跡である三内丸山遺跡の例を取り上げよう。山地雄大氏と業天唯正氏が発表した、「研究ノート」誌上における集計では、三内丸山遺跡及び隣接して所在する近野遺跡で出土した2点を含めて、ヒスイ点数は総計59点になる<sup>(48)</sup>。一言でいえば驚愕の数で、千葉県全域から出土している中期～後期前葉のヒスイ製品の総点数を上回るのである<sup>(注6)</sup>。ただ、三内丸山遺跡のヒスイは、前期末葉～中期後葉の長期間に形成され盛土遺構から出土しており、個々の帰属時期の特定は難しいようだ。前期末葉や中期前葉に確実に比定可能となる成品が明らかになっていないので、大部分が中期後半の帰属になると推測される<sup>(49)</sup>。

発見された成品は、前述の「研究ノート」の分類案による大珠A、大珠B、大珠Cが認められる<sup>(注7)</sup>。中でも、遺跡を特徴づけるのは大珠Aであり、鈴木克彦氏の分類による根付形になる<sup>(10)</sup>。ここで鈴木氏の根付形大珠を再確認すれば、「直径が縦横ほぼ同率で平面形が丸型つまり円形を基調にして平面中央に穿孔するもの」が基本形として定義され、「平面形が円形であっても側面形（断面）が餅状を呈するもの（偏丸形）、板状を呈するもの（偏平形）が見られ」、さらに5種の類型に分類されている<sup>(50)</sup>。「研究ノート」の集計では、鈴木氏の基本形態の成品完形品が3点、そのほかの類型が2点出土し、欠損品も存在する。そして両氏は、この根付形大珠について、「円塊状の原石ないし多面体の敲石を原産地から入手し、入念に研磨・穿孔することで、大珠A類の生産も行っていたとみられる」と考えている。また、素材となる剥片、研磨痕を有する剥片、穿孔途中品の存在から垂飾の製作も行われていたとみている。さらに大珠Bとした緒締形、大珠Cとした鯉節形は搬入品になるとみている。

大珠A、すなわち根付形は、先に取り上げた明戸遺跡から前期末葉に比定された欠損品が出土し、同形態で珪質頁岩製の垂飾が、東津軽郡蓬田村山田（2）遺跡の前期末葉～中期前葉に主に形成された捨て場遺構から出土している<sup>(51)</sup>。このような事例から、根付形は青森県地域にすでに浸透していた形状であったと考えられる。いわば伝統的な装身具の形態になっていたのであろう。ヒスイ産出地に所在する長者ヶ原遺跡や寺地遺跡では、根付形大珠生産の痕跡は発見されていない。したがって三内丸山遺跡における生産は十分にあり得ることである。しかし、幾つかの疑問点がある。まず、原石の点数がわずかであることである。指摘されているように、多面体敲石を搬入し、それを素材として製品に仕上げる方法にしても、ある程度の大きさの多面体敲石が相応量必要であったはずである。その多面体敲石も含め、生産遺跡としては素材となる原石が少ない、というのが素朴な疑問である。さらに剥片の点数や砥石が少ない。生産を肯定するならば、長期間にわたり、大変に歩留まりの良い方法を獲得していたことになる。二つ目の疑問点は、そもそも原石や剥片類に比較して、成品や未成品の点数が多い点である。ヒスイ産出地の生産遺跡にはみられないことである。しかし、現時点ではそのような疑問点を持ちつつ、産出地周辺に生産の痕跡が認められない以上、遺跡内の生産と使用を否定はできない。

根付形大珠は、三内丸山遺跡のほかに水上（2）遺跡、富ノ沢（2）遺跡など青森県内の遺跡と、北海道の青苗遺跡など道南の遺跡から出土しており<sup>(49)</sup>、津軽海峡を挟んだこの地域が分布の中心とみられる。福田友之氏は、「三内丸山遺跡等の円盤・円塊状の大珠については、分布が本県域や北海道南部といった

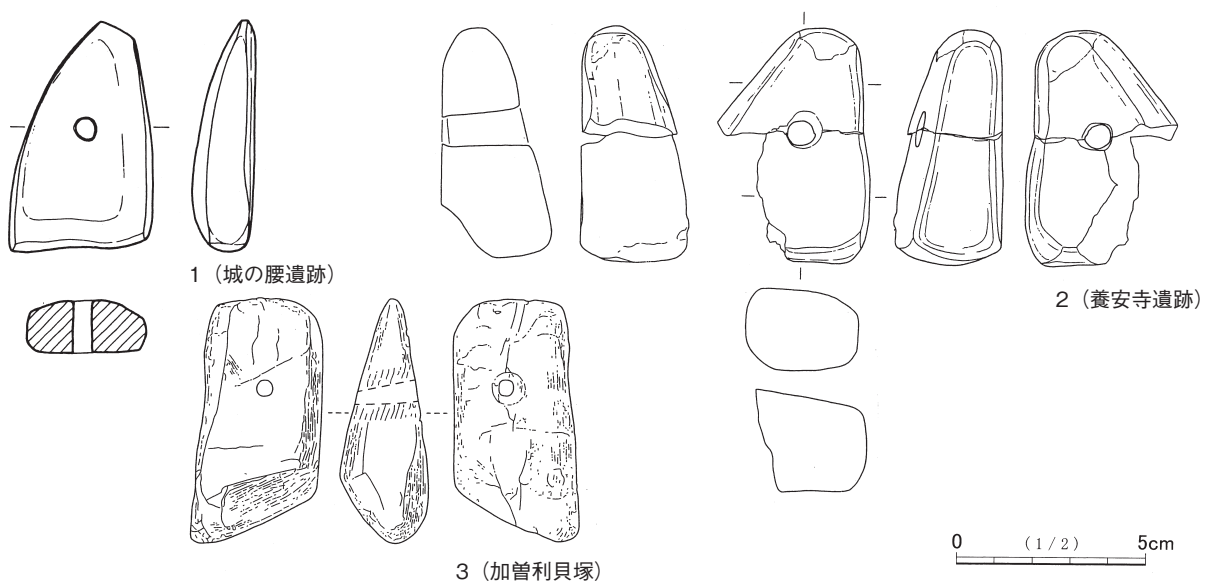
津軽海峡域に限定されるものであるが、この製作には、製品のほか未製品・原石片・原石塊（ハンマー・ストーン状）があることから、筋砥石・工房跡は明確ではないものの、この地でヒスイ玉類の製作を行ったとみられる」と指摘している<sup>(52)</sup>。

根付形大珠の分布については、青森県地域に中心があり、北海道の道南地域に拡がるようである。それでは、関東地方で散発的に出土する類例、例えば世田谷区に所在する明治薬科大遺跡の加曾利EⅡ式期に比定された竪穴住居から出土した欠損品<sup>(53)</sup>、千葉市に所在する加曾利貝塚の出土品<sup>(54)</sup>、実測図は公表されていないが、銚子市に所在する栗島台遺跡表採品である垂飾<sup>(55)</sup>などは、青森県地域で生産されて搬入されたのであろうか。鈴木克彦氏が指摘しているように、明治薬科大遺跡出土品は棒状錐による両側穿孔で、青森県地域での穿孔方法とは異なっている<sup>(50)</sup>。しかし、詳細な帰属時期が不明である加曾利貝塚出土品は、総括報告書の中で「円柱状で、上下端は平坦に研磨、側面は素材の形状を残す。孔は片面から垂直に43mm穿たれている。被熱による変色で光を通さないが、表面の劣化は少ない」特徴を持つと観察されている<sup>(56)</sup>。形態や穿孔方法は、東北地方に分布する類いに近似する。現状では青森県地域からの搬入説も、有力な仮説の一つになる。

### (3) 千葉県におけるあり方

次に前期の大珠が出土した大松遺跡が所在する千葉県の状況を確認したい。大松遺跡の諸磯a式期の竪穴住居から出土した大珠に、時期的に継続する資料は現在のところ発見されていない。しばらく経過した後、それも阿玉台式期～いわゆる中峠式期まで待たなければならない。大松遺跡出土大珠の次の段階と考えられる大珠を第5図に挙げてみた。

1は千葉市に所在する城の腰遺跡<sup>(57)</sup>から出土した大珠である。この遺跡は阿玉台式期～中峠式期に環状集落が形成され、加曾利E式期を迎えることなく短期間で集落が途絶えた遺跡である。その遺構外から出土した大珠である。大きさは、長さ60.0mm、幅38.0mm、厚さ14.0mmである。形状は不整の三角形状でやや厚さがあり、中央部からやや上に片側穿孔による孔が存在する。側面は角張っており、漂石に調整を施して仕上げていると考えられる。



第5図 千葉県における盛行期直前段階の大珠

2は太平洋側の東金市に所在する養安寺遺跡<sup>(58)</sup>から出土している。この資料は2点の破片が接合しているが、まだ欠損部がある。遺跡は阿玉台式期後半～加曾利EⅡ式期にかけて集落が営まれており、阿玉台後半期の遺構が最も多く検出されている。そのような集落で、遺構に伴わない状態で、別々の地点から破片が出土して接合した。現状で長さ62.8mm、幅40.6mm、厚さ28.4mmである。やや分厚い素材に調整を施し、中央部からやや上に片側から穿孔を行っている。表裏から側面へは角張っており、漂石を素材にしていたとみられる。

3は加曾利貝塚から出土している。この大珠は、昭和24年(1949年)の國學院大學による発掘で出土したものである<sup>(59)</sup>。大きさは、長さ60.0mm、幅34.0mm、厚さ24.0mmになり、平面形状は不整な長方形で、穿孔は片側から行われている。寺村光晴氏は、「たぶん阿玉台式土器にともなったものであろうといわれている大珠が出土している。これはヒスイの転石にそのまま孔をあけたもの、といってもよいものである」と解説している<sup>(60)</sup>。

以上の3点が、大松遺跡から出土した大珠に次ぐ段階と考えられる。3点に共通する特徴は、漂石に研磨や穿孔などの加工を施して仕上げている点になる。この特徴は、前期に比定されている山梨県天神遺跡の大珠と通じるともいえ、定型的な鰹節形大珠の先駆けの存在となる。その後、加曾利E式期に至ると、船橋市に所在する高根木戸貝塚<sup>(61)</sup>、柏市に所在する小山台遺跡B区<sup>(62)</sup>などから出土した、典型的な鰹節形大珠の出土が目立ってくる。多くの資料が明確な時期比定が難しく、断言は避けるべきかもしれないが、加曾利EⅠ式期に大珠の盛行期がやってくるとみて良さそうである。そして、これらはヒスイ産出地に所在する生産遺跡で製作されたもの、とみることが妥当といえる。

大珠盛行期頃、千葉県では根付形大珠や緒締形大珠の存在も確認されている。しかし、どちらも点数はわずかにすぎない。特に、緒締形大珠については、ヒスイ産出地遺跡でも生産されていた可能性もあるが、それを必要とする地域が狭小であったため、生産量が少量であったとも考えられる。また、零細な現地生産を行っていた可能性もある。そもそも地域における需要が低いために、主たる類型の選択肢から外されていたのであろうか。次節では、本県では主体にならなかった緒締形大珠を取り巻く状況について簡単にふれ、摺筆に繋げたい。

#### (4) 緒締形大珠のあり方

緒締形大珠は、鈴木克彦による具体的な検討が特筆される<sup>(50)</sup>。まず定義について「長方形を基調に長軸方向に穿孔するもの」で、「特に定形というものがなく、平面形と側面形(断面)の幅が異なり、大きさもまちまち」になるものとされる。さらに、立柱形、円柱形、方偏平行(長方形)、円柱形、不整形の5種に分類できるといふ。

先に述べたように、三内丸山遺跡では緒締形大珠が出土している。ほかに岩手県盛岡市に所在する川目C遺跡からも大変整った円柱形の緒締形大珠が出土している<sup>(63)</sup>。千葉県における出土例は少ないが、古くから知られている例として、阿玉台貝塚出土の方偏平行がある<sup>(64)</sup>。これらは形状が整えられ、形状へのこだわりが伝わってくるものである。ただ、青森県や岩手県で緒締形大珠が出土しているからといって、根付形大珠がそうであったように、東北地方にその分布の中心があるのだろうか。

東北地方以外の地域で、緒締形大珠を出土している遺跡は、東京都や神奈川県内に目立って多く分布する。山本孝司氏の平成24年(2012年)の東京都出土品集成では、多孔形を含め、21点の緒締形大珠が確認されている<sup>(65)</sup>。鰹節形大珠に分類された大珠が25点なので、いかに緒締形大珠が多くを占めているかわ

かる。その出土時期は、勝坂式土器を伴う時期にまで遡る。同年の坪田弘子氏による神奈川県内の集成では、鯉節形大珠19点、緒締形大珠6点となっている<sup>(66)</sup>。東京都では鯉節形大珠点数の85%に相当する個体数が出土し、神奈川県では鯉節形大珠の約33%に当たる点数が出土している。この隣接する2都県と、関東地方の群馬県<sup>(67)</sup>、栃木県<sup>(68)</sup>、埼玉県<sup>(69)</sup>、茨城県<sup>(70)</sup>などの存在が顕著ではない地域と、県の北部から出土が認められる千葉県<sup>(71)</sup>の状況とは、緒締形大珠のあり方で際立つ違いが存在する。東京都から神奈川県、そして千葉県北部にわたる地域が、関東地方における緒締形大珠の中心的な分布域とみてよさそうである。しかし、出土数からみた中心的な分布域にもかかわらず、東北北地域と同様に、現在までに本地域での生産の痕跡は発見されていない。直方体様のヒスイ原石を搬入して、穿孔と研磨を施して成品にしたとも考えられるが、証明できるだけの材料がない。鯉節形大珠については、ヒスイ産出地に所在する遺跡で生産され、それが千葉県などに搬入されたと考えられる。一方で、勝坂式期に東京都や神奈川県に出現してくる緒締形大珠は、ヒスイ産出地地域での生産が明らかになっていない。したがって、現在は搬入経路について不鮮明といわざるをえない。将来、産出地周辺遺跡で緒締形大珠の生産が確認されれば、鯉節形大珠と同様に、そちらからの成品搬入が最も説得力を持つことになるであろう。また、分布の中心地域において生産の痕跡が確認されたならば、地域の需要に応じて現地生産されていた可能性が高いことになる。ただ、不明な点が多く、性急に結論を出すことは控えなければいけないと思っている。なお、千葉県の緒締形大珠については、別稿において紹介を予定している。

いずれにしても、緒締形大珠の分布には明らかな偏向傾向を認めることができる。それが何故本州の最北地域と南関東の一部地域になるのであろうか。今のところ、この事象以外に共通する文化的個別事象を見つけ出すことができない。そのため分布域の顕在化形成の要因について糸口がつかめないでいる。形態や時期的な変遷を、より明確にする作業が必要と考えられる。

## 5 おわりに

以上、縄文時代におけるヒスイの利用と大珠盛行期までを検討し、問題点の抽出をもくろんで進めてきた拙稿である。全般にいえることは、時期比定が可能となる資料の少なさである。これは遺跡に持ち込まれたヒスイの最終のあり方に関係することであり、その探求は究極の課題といっても過言ではない。限定資料から確認し得た最古の使用は、従来からの指摘どおり、大角地遺跡出土の敲石としてヒスイを用いた例になる。道具としての利用が最古の使われ方になる。今のところ前期前葉をさらに遡るヒスイ利用は確認されていない。その後ヒスイ産出地から遠く離れた地域で、大珠や垂飾が出土する。時期は前期後半期と考えられ、漂石に加工を施し穿孔した成品が、大松遺跡や天神遺跡で発見されている。また、その頃から中期前葉にかけて、ヒスイ産出地と周辺に所在する遺跡からヒスイが散見され、青森県地域での出土数が突出してくる。青森県地域でのヒスイ製品の採用は、ほかの地域よりも早く、何らかの契機があったと考えられるが、それを解明していくことは難しい。

中期後半になると、ヒスイ産出地遺跡で鯉節形大珠の生産が本格化し、各地に搬出されていったと考えられる。前段階でヒスイ製品が多出していた青森県地域では、鯉節形大珠が認められるほか、根付形大珠が中心的な存在になっている。特に三内丸山遺跡では、遺跡内での根付形大珠作りが推測されている。実際に遺跡内での生産であったか、あるいは搬入なのか、どちらにしても明確な裏づけをしていくことが必要である。同様に、青森県と岩手県、東京都から神奈川県そして千葉県北部地域を中心に分布する緒締形

大珠についても、さらなる検討を進めなくてはならない。

以上のように、ヒスイ利用を巡って確認できたことと不明瞭な部分を抽出した。といっても、この作業は単に先学の研究に屋上屋を架したにすぎない。現在、ヒスイ研究は次なる段階への気運が高まってきていると感じられる<sup>(72)</sup>。特に「加熱処理」に注目した生産に関することや、原石類の流通に関わる視点は、これからの研究課題になっていくと思われる。情報の収集に努めていきたい。

当財団が設立50周年を迎え、半世紀にわたる歴史を振り返ると、組織として積み重ねた年月には感慨深いものがある。千葉県に就職して以来、4度財団に在籍し、多くの発掘や整理作業に従事することができた。この間様々な機会を与えていただいたことに感謝したい。

小論をまとめるに際し、ヒスイ関連資料の見学などで下記の機関・諸氏には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

青森県埋蔵文化財調査センター 朝日町まいぶんKAN 生坂村教育委員会 井戸尻考古館

三内丸山遺跡センター 世田谷区教育委員会 千葉県教育庁文化財課 長者ヶ原考古館

山梨県立考古博物館 岡本 洋 長田友也 加藤 学 加納 実 川端典子 木村隼人 齊藤慶史 品川裕昭

柴田亮平 高梨俊夫 館山 友香理 坪田弘子 野代幸和 長谷川 大旗 平澤愛里 山岸洋一

注

1. 「宝石」については、斯界において学術的な定義はなされていないようだが、重要な要件として、「美しいこと」、「耐久性があること」、「適度のおおきさがあること」が挙げられている。さらに「希少性」が加わり、それらの要件を満たした鉱物を「宝石」と呼ぶようである<sup>(73)</sup>。ヒスイは以上の要件を満たすので「宝石」といわれる。
2. 氷見市のホームページの解説を引用すると、この資料は「大正末～昭和初年頃、国指定史跡朝日貝塚の指定地東側の道路拡幅工事で出土した縄文時代中期の鯉節形大珠。硬玉（ヒスイ）を丁寧に整形・研磨してあり、長さ15.9センチメートル、幅4.7センチメートル、重量471グラムを測る」と説明されている。
3. 栗島義明氏は、平成14年（2002年）に埼玉県の大珠を集成し、大珠の「確保や保有が集団に帰属していたであろう」との考えを示した<sup>(74)</sup>。その後、平成19年（2007年）に、「関東地方では同心円状に展開する環状集落内の土壙群、その中心部に位置する土壙にのみ硬玉製大珠が副葬されているのが通例である」と、出土傾向の地域的様相と環状集落内の出土位置に注目した。また、ヒスイ製大珠は、「集団の統率者あるいは首長といった特定人物のみが保有・管理」し、「集団内における地位・位階を表示する威信財として価値が定まっていたに違いない」と、大珠を威信財として位置づけた<sup>(75)</sup>。以来、威信財をキーワードに多くの論考を発表している。
4. 大松遺跡の報告書は、平成23年（2011年）に刊行され、大珠の出土が公表された<sup>(28)</sup>。報告書が刊行されてしばらく経過しても、この大珠に対する反応は鈍かった。というよりか、評価について耳朶に触れることはなかった。筆者は平成24年（2012年）に改めて本例を紹介したが<sup>(71)</sup>、何ら変化は感じられなかった。そのような状況から平成26年（2014年）には、「時期の決定には慎重を期す必要があり、前期の出土例を待って判断を下してもよいとも思われる」と、時期決定にやや躊躇するようになった<sup>(29)</sup>。さらに平成28年（2016年）に三度目にこの大珠を取り上げた際には、単に出土状況と属性を紹介するにとどめた<sup>(76)</sup>。しかし、10年以上経過しても、研究者による検討対象として、本例が俎上に載ったことを寡聞にして知らなかった。令和6年（2024年）11月に糸魚川市で開催された、ヒスイのシンポジウムにおいて、加藤学氏が、その発表要旨で最も古い事例として本大珠を紹介している<sup>(72)</sup>。ようやくにして研究対象に挙げられようになった。
5. 富山県下新川郡朝日町に所在する境A遺跡<sup>(77)</sup>は、玉の生産遺跡として知られている。玉の種類では、大珠と勾玉・管玉・垂飾・丸玉・小玉・白玉がある。製作時期は大きく2時期に分かれ、大珠は中期の可能性が高く、勾玉などは後期～晩期に生産されたと推測されている。しかし、土器を伴い時期を分離可能となる状態ではないので、大珠生産の厳密な時期比定は困難である。大珠が後期前葉まで存在することを考えると、ここでは中期の生産遺跡からは外しておきたい。
6. 令和2年（2020年）に千葉県出土のヒスイを再度集計した際、中期に帰属が考えられる点数は50点にはわずかに足ら

なかった<sup>(78)</sup>。その後柏市所在の山遺跡から出土した2点のヒスイ製品が報告された<sup>(79・80)</sup>。これを追加してもまだ三内丸山遺跡の点数に及ばない。

7. 山地雄大氏と業天唯正氏は、三内丸山遺跡から出土した大珠を考察する中で、次のようなA類、B類、C類の3類に分けて説明した<sup>(48)</sup>。A類：球状丸形を呈し、上面観は円形で中央に穿孔部がある。B類：柱状、箱状や筒形を呈し、正面観は長方形で長軸方向に穿孔する。C類：楕円形を呈し、中央に短軸方向の穿孔を基本とする。両氏の分類は、鈴木分類<sup>(10)</sup>の、根付形、縮縮形、鱗節形にそれぞれ対応している。

#### 引用・参考文献

1. 八幡一郎 1940「硬玉製大珠の問題」『考古学雑誌』第30巻第5号 考古学会
2. 八幡一郎 1941「硬玉の礦脈」『ひだびと』第9巻第6号、1979 八幡一郎著作集第2巻所収 雄山閣
3. 河野義礼 1939「本邦に於ける翡翠の新産出及び其化学性質」『岩石鉱物鉱床学』第22巻5号
4. 安藤文一 1982「翡翠」『縄文文化の研究』第8巻 雄山閣
5. 宮島宏ほか 2019「日本の国石「ひすい」ひすい再発見の不思議」『日本の国石「ひすい」－バラエティーに富んだ鉱物の国－』土山明編 成山堂書店
6. 樋口清之 1940「垂玉考」『考古学雑誌』第30巻第6号 考古学会
7. 江坂輝彌 1957「所謂硬玉製大珠について」『銅鐸』13 立正大学考古学会、1982「いわゆる硬玉製大珠について」『縄文土器文化研究序説』六興出版所収
8. 寺村光晴 1965「硬玉製大珠論」『上代文化』第35輯 国学院大学考古学会
9. 安藤文一 1983「翡翠大珠」『縄文文化の研究』第9巻 雄山閣
10. 鈴木克彦 2004「硬玉研究序論」『玉文化』創刊号 日本玉文化研究会
11. 加藤学 2023「縄文時代前期・中期におけるヒスイ玉の製作」『新潟県考古学会 2023年度秋季シンポジウム 発表要旨』新潟県考古学会
12. 荒川隆史ほか 2019『2019年度秋季企画展 海をわたったひすい』新潟県埋蔵文化財センター
13. 小川貴行 2020『令和2年度特別展 JOMON Period』茨城県立歴史館
14. 岡本淳一郎ほか 2021『令和3年度特別展 珠玉球』富山県埋蔵文化財センター
15. 山本孝司 2021「ヒスイロードとコハク」『東京に生きた縄文人』東京都江戸東京博物館編集
16. 神原雄一郎 樋下理沙 2022『盛岡の縄文文化』盛岡市遺跡の学び館
17. 業天唯正 山地雄大 2023『特別展 三内丸山とヒスイ』三内丸山遺跡センター
18. 高橋満 2024『縄文DX』福島県立博物館
19. 上守秀明ほか 2024『地中からのメッセージ－旧石器・縄文・弥生－』（公財）千葉県教育振興財団
20. 鈴木克彦 2004「硬玉製大珠（ヒスイ大珠）」『季刊考古学』第89号 雄山閣
21. 立田理ほか 2000『八雲町シラリカ2遺跡－北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書－』（財）北海道埋蔵文化財センター
22. 熊谷仁志ほか 1990『余市町 フゴッペ貝塚』（財）北海道埋蔵文化財センター
23. 小笠原雅行ほか 2007『宮田館遺跡VI－青森県動物愛護センター建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』青森県教育委員会
24. 下山信昭ほか 1995『熊ヶ平遺跡』青森県教育委員会
25. 平山明寿ほか 2004『笹ノ沢（3）遺跡』青森県教育委員会
26. 成田滋彦ほか 2010『明戸遺跡・高屋遺跡』青森県教育委員会
27. 太田原潤ほか 2000『餅ノ沢遺跡』青森県教育委員会
28. 西川博孝ほか 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4－柏市大松遺跡－』（財）千葉県教育振興財団
29. 小林清隆 2014「千葉県の玉文化研究の歩みと課題」『関東地方の玉文化研究のあゆみ』日本玉文化学会
30. 新津健ほか 1994『天神遺跡－県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－』山梨県教育委員会

31. 西沢寿晃ほか 1999『東部八幡原遺跡』生坂村教育委員会
32. 前山精明ほか 2002『南赤坂遺跡 - 縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査-』  
巻町教育委員会
33. 田中亨ほか 2017『西谷遺跡Ⅱ』刈羽村教育委員会
34. 平吹靖 2004「柏崎市大宮遺跡出土の日本最古の縄文時代前期ヒスイ加工品」『玉文化』創刊号 日本玉文化研究会
35. 加藤学ほか 1999『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ』新潟県教育委員会
36. 加藤学ほか 2006『北陸新幹線関係発掘調査報告書 大角地遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
37. 山本正敏ほか 1987『北陸自動車道遺跡調査報告 - 朝日町編3 -』富山県教育委員会
38. 島瑞穂 2005『富山県朝日町 柳田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』朝日町教育委員会
39. 町田賢一ほか 2014『小竹貝塚発掘調査報告書』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
40. 朝田亜紀子ほか 2013『上久津呂中屋敷遺跡発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団
41. 木島勉 1995「縄文時代における翡翠製玉類の生産 - 研究の現状と課題 -」『フォッサマグナミュージアム研究報告』  
No.1 フォッサマグナミュージアム
42. 長谷川大旗 2023「青森県域におけるヒスイ玉の様相」『新潟県考古学会 2023年度秋季シンポジウム 発表要旨』  
新潟県考古学会
43. 関雅行 2015「ヒスイ大珠の製作と石材についての問題 - 新潟県の縄文中期の大型大珠集成とその形態から -」『新潟考古』  
第26号 新潟考古学会
44. 清水潤三ほか 1964『長者ヶ原』糸魚川市教育委員会
45. 寺村光晴ほか 1987『史跡 寺地遺跡』青海町
46. 小池悠介 2023「糸魚川地域における縄文時代のヒスイ加工の様相」『新潟県考古学会 2023年度秋季シンポジウム  
発表要旨』新潟県考古学会
47. 長田友也 2018「馬高式期における文化動態 - 硬玉製大珠・蛇紋岩製磨製石斧を中心に -」『馬高式土器の成立・展開・  
終焉』予稿集 津南町教育委員会
48. 山地雄大 業天唯正 2024「研究ノート 三内丸山遺跡におけるヒスイ加工と玉類の展開」『研究紀要』5  
三内丸山遺跡センター
49. 岩田安之 2021「中継交易と加工交易 - おもに黒曜石とヒスイからみた三内丸山遺跡における遠隔地交易の実態 -」  
『研究紀要』2 三内丸山遺跡センター
50. 鈴木克彦 2005「緒縮形、根付形、三角形大珠の研究」『玉文化』第2号 日本玉文化研究会
51. 小田川哲彦ほか 2011『山田（2）遺跡』青森県教育委員会
52. 福田友之 2014「津軽海峡域の装身具」『津軽海峡域の先史文化研究』六一書房
53. 佐藤史人ほか 2000『明治薬科大遺跡』世田谷区教育委員会
54. 今井公子ほか 1971『加曾利貝塚Ⅳ』千葉市加曾利貝塚博物館
55. 大場磐雄 1952「粟島臺遺跡に対する一考察」『上代文化』國學院大學考古學會
56. 西野雅人 2017「第4章遺物 11玉」『史跡加曾利貝塚 総括報告書』千葉市教育委員会
57. 菊池眞太郎ほか 1979『千葉市城の腰遺跡』（財）千葉県文化財センター
58. 小林清隆ほか 2017『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32 - 東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺  
跡-』（公財）千葉県教育振興財団
59. 田中英世 2017「第4章遺物 第7節外部保管資料」『史跡加曾利貝塚 総括報告書』千葉市教育委員会
60. 寺村光晴 1995「ヒスイの大珠」『日本の翡翠 - その謎を探る -』吉川弘文館
61. 西野元ほか 1971『高根木戸』船橋市教育委員会
62. 西川博孝ほか 2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15 - 柏市小山台遺跡B区-』（財）千葉県教育振興財団
63. 佐々木亮二 2009『川目A遺跡 - 国道106号線改良に伴う市道建設関連発掘調査報告書-』盛岡市教育委員会
64. 下村三四吉・八木奨三郎 1894「下総香取阿玉台貝塚探求報告」『東京人類学雑誌』第9巻97号 東京人類学会

65. 山本孝司 2012「東京都内出土の大珠およびヒスイ・コハク製品について」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
66. 坪田弘子 2012「神奈川県出土の大珠とヒスイ製品」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
67. 谷藤保彦 2012「群馬県内におけるヒスイ製大珠と垂飾り」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
68. 上野修一 2012「栃木県出土の硬玉製大珠」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
69. 森山高 2012「埼玉県における大珠をめぐる状況」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
70. 瓦吹堅 2012「茨城県の大珠」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
71. 小林清隆 2012「千葉県出土の大珠について」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
72. 荒川隆史ほか 2024『ヒスイ シンポジウム 縄文時代～古墳時代のヒスイ加工と流通 発表要旨』
73. 諏訪恭一・門馬綱一・西本昌司・宮脇律郎 2022「宝石とは」『宝石大全』ナツメ社
74. 栗島義明 2002「埼玉県内出土の大珠について」『埼玉考古』第37号 埼玉考古学会
75. 栗島義明 2007「硬玉製大珠の社会的意義」『縄文時代の社会考古学』同成社
76. 小林清隆 2016「房総における大珠の在り方（その2）」『玉文化研究』第2号 日本玉文化学会
77. 山本正敏 1990『北陸自動車道遺跡調査報告 - 朝日町編5 - 境A遺跡 石器編』富山県教育委員会
78. 小林清隆 2020「房総における大珠の在り方（その3）」『研究連絡誌』第82号（公財）千葉県教育振興財団
79. 稲村晃嗣ほか 2021『柏市柏インター西土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書3 - 出山遺跡（第9次） - 』  
柏市柏インター西土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査共同企業体
80. 坪田弘子ほか 2024『柏市柏インター西土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 出山遺跡（第7次） - 』  
柏市柏インター西土地区画整理組合